

高校入試制度改革の影響力

—受験生を中心に—

松 森 武 嗣

はじめに

近年の学校教育改革の動向は、明治期の「学制」、戦後の「新学制」に匹敵するほど、大規模かつ多様なもので、それらの改革の内実は、1971（昭和46）年に中央教育審議会が答申した「第三の教育改革」¹⁾にまで遡ることができる。だが、当初は教育界の反発により何ら実施に至らなかった。

高校制度改革が本格的に実施されたのは、1993（平成5）年2月の文部省通知「高等学校の入学選抜について」からである。この年以降、高校制度改革は各都道府県ごとに多様な形態をとりながら、全国的に波及している。

本稿は、長崎県の長崎地区、佐世保地区、諫早地区で実施されていた総合選抜制度²⁾が、2003（平成15）年度から3地区同時に単独選抜制度へ移行したことを契機に実施した、長崎地区における「単独選抜高校入試制度に関する調査」結果の摘要である。つまり、規制緩和の方向性における、教育面での一つの徴表である高校改革のなかでも、公立高校入試制度改革に焦点を絞った調査結果に基づいており、特に受験生への影響を追究している。

1. 調査の概要

1. 1 調査の目的と対象

調査は、単独選抜高校入試制度への変更が、高校入試の関係者にどのように受け取られ、また関係者はどのような対応をしたのかを探るために実施された。ただし、本稿では受験生への影響を探ることに焦点を当てているため、受験生にまつわる設問を中心に分析した結果に限定している。

なお調査対象は、2003（平成15）年の公立高校入試の関係者として、旧長崎5高校の受験生であった新高校1年生、それらの生徒たちを現場でみていた長崎市内の公立中学校教員、長崎市とその近郊で開業している学習塾の教員である。

1. 2 調査の時期と方法

調査は、2003（平成15）年7月中に、それぞれの調査対象ごとに個別の質問紙——ただし、共通の設問を含む——において実施された。ただし、2つの中学校は8月に実施された。

旧長崎5高校の新高校1年生への調査は、各高校の教員を通じて実施していただいた。中学校教員への調査は各中学校の管理職を通じて、学習塾への調査は経営者を通じて、それぞれ教員全員の協力をお願いした。

調査対象の抽出については、旧長崎5高校は全校対象であるが、生徒のサンプル数は、事前に

クラス数(A 高<普> 3、B 高<普> 2、B 高<普・文コ> 1、B 高<普・理コ> 2、C 高<普> 3、D 高<普> 3、E 高<普> 2、E 高<理数> 2) を指定した。中学校と学習塾では無作為抽出した。ただし、前者は、事前に了解を得た調査協力可能校に対して実施した。

有効回答数は、新高校1年生720名(回収率100%)、中学校10校の教員120名(回収率56.1%)、学習塾32塾(回収率25.6%)の教員49名であった。ただし学習塾では、塾生数49人未満が59.4%を占めており、調査協力塾の多くは零細塾であった。

2. 調査の結果

本調査の新高校1年生向け質問紙で、分析使用に加工した変数、カテゴリーとその比率については表1に示す。

表1 使用した変数と回答者比率

変数		カテゴリー	比率
単独選抜制度評価		- 2. 悪いこと	6.3
		- 1. どちらかと言えば悪いこと	11.8
		0. どちらとも言えない	31.3
		1. どちらかと言えば良いこと	25.5
		2. 良いこと	25.1
志願理由	高い進学率	0. いいえ	31.2
		1. はい	68.8
	職業可能性	0. いいえ	52.4
		1. はい	47.6
	個性の伸長	0. いいえ	75.4
		1. はい	24.6
	カリキュラム	0. いいえ	87.6
		1. はい	12.4
	校風が好き	0. いいえ	66.3
		1. はい	33.7
	伝統	0. いいえ	94.4
		1. はい	5.6
	傾斜配点入試	0. いいえ	95.1
		1. はい	4.9
成績相応	0. いいえ	75.3	
	1. はい	24.7	
通学の便	0. いいえ	58.7	
	1. はい	41.3	
友達と同じ	0. いいえ	90.2	
	1. はい	9.8	
近親者と同じ	0. いいえ	84.8	
	1. はい	15.2	
その他	0. いいえ	97.1	
	1. はい	2.9	
生活態度		- 1. 変えない	52.6
		0. わからない	27.7
		1. 変えた	19.7
受験形態		0. 推薦入試	24.3
		1. 一般入試	75.7
志願変更理由	成績上昇	0. いいえ	97.0
		1. はい	3.0
	成績下降	0. いいえ	91.1
		1. はい	8.9
進学したい高校	0. いいえ	68.3	
	1. はい	31.7	
進学したい学科・コース	0. いいえ	68.8	
	1. はい	31.2	

変 数		カテゴリー	比 率
志願変更理由	友達と同じ	0. いいえ	99.5
		1. はい	0.5
	近親者	0. いいえ	98.0
		1. はい	2.0
先生の勧め	0. いいえ	93.1	
	1. はい	6.9	
その他	0. いいえ	84.2	
	1. はい	15.8	
A 高校		0. いいえ	83.5
		1. はい	16.5
B 高校		0. いいえ	72.2
		1. はい	27.8
C 高校		0. いいえ	83.9
		1. はい	16.1
D 高校		0. いいえ	82.5
		1. はい	17.5
E 高校		0. いいえ	77.9
		1. はい	22.1
志願の異同		- 1. 同じ	59.3
		0. わからない	5.7
		1. 違う	35.1

2. 1 単独選抜制度

2. 1. 1 単独選抜制度評価

新制度について尋ねたものである。「良いこと」「どちらかといえば良いこと」を合わせると、単独選抜制度への変更は好意的に受け取られている。特に、学習塾教員が最も高く、当事者であった高校1年生も半数は支持している。

表2 単独選抜制度評価

人数 (%)

	良いこと	どちらか 良いこと	どちらとも 言えない	どちらか 悪いこと	悪いこと	合 計
高校1年生	179(25.1)	182(25.5)	223(31.3)	84(11.8)	45(6.3)	713(100.0)
中学校教員	16(13.3)	39(32.5)	46(38.3)	12(10.0)	7(5.8)	120(100.0)
学習塾教員	17(34.7)	17(34.7)	13(26.5)	1(2.0)	1(2.0)	49(100.0)
合 計	212(24.0)	238(27.0)	282(32.0)	97(11.0)	53(6.0)	882(100.0)

Kruskal Wallis $\chi^2 = 10.439$, $p = .005$

2. 1. 2 評価の理由

表2において、新制度を好意的に捉えている者を対象としているが、「その他」のカテゴリーは除いている。

「高校選択の自由」が他の選択肢を圧倒している。特に、高校1年生にとって、何よりも重要な意味をもっていたことを示している。中学校教員や学習塾教員は、「高校の独自性」という理由において、制度変更を幾分冷静にみているなかで、中学校教員には「個性の伸長」という生徒本位の教育的観点から捉えている者もいる。

表3 好意的評価の理由

人数 (%)

	高校選択の自由	進路に好都合	共通意識の友達	個性の伸長	高校の独自性	愛校心	合計
高校1年生	303(85.6)	5(1.4)	18(5.1)	4(1.1)	20(5.6)	4(1.1)	354(100.0)
中学校教員	37(68.5)	0	1(1.9)	5(9.3)	11(20.4)	0	54(100.0)
学習塾教員	23(67.6)	1(2.9)	0	1(2.9)	9(26.5)	0	34(100.0)
合計	363(82.1)	6(1.4)	19(4.3)	10(2.3)	40(9.0)	4(1.0)	442(100.0)

 $\chi^2=45.021$ 、 $p=.000$

ところで、好意的に捉えていない者の理由としては、高校1年生では「高校受験競争激化」(47.7%)、「高校選択悩み」(20.3%)と「高校間競争激化」(17.2%)が、中学校教員では「高校受験競争激化」(47.1%)と「中学悪影響」(23.5%)が高くなっている。中学校教員には、高校受験競争激化による、例えば受験中心の中学校への変質に危惧を抱いている姿もうかがえる。いずれにしても、両者の立場の相違も見受けられる。

2. 1. 3 志願理由による単独選抜制度評価の規定要因

受験生における、志願理由による単独選抜制度評価の規定要因は、「校風が好き」「個性の伸長」「友達と同じ」が有意である。「校風が好き」と「個性の伸長」は新制度を歓迎しているが、「友達と同じ」はその逆である。つまり、高校の独自性としての校風が好きとか、生徒の個性を伸ばすという理由で評価しているが、友達と同じ高校への進学可能性の低減という理由で望ましく思っていない。

表4 志願理由による単独選抜制度評価の規定要因

(重回帰分析:ステップワイズ法)

独立変数	B	標準誤差	β	p 値
友達と同じ	-.401	.146	-.103	.006
個性の伸長	.315	.100	.117	.002
校風が好き	.263	.092	.107	.004
定数	.393	.062		.000
R	.206			
調整済 R ²	.038			
F 値	10.348			
Signif.	.000			
N	706			

2. 2 生徒への影響

2. 2. 1 単独選抜制度評価と生活態度との相関分析及び単回帰分析

「単独選抜制度評価」は「生活態度」と相関があるとは言えず、それゆえ影響を与えているとは言えない。

表5 単独選抜制度評価と生活態度との相関分析及び単回帰分析の結果

従属変数	相関分析		単回帰分析				
	r	p 値	調整済 R ²	F 値	B	標準誤差	p 値
生活態度	-.071	.067	.004	3.371	-.071	.026	.067

独立変数：単独選抜制度評価

2. 2. 2 単独選抜制度評価と受験形態との相関分析及び単回帰分析

「単独選抜制度評価」は「受験形態」と負の相関があり、それゆえ新制度を好意的に受け取っている者は、「推薦入試」で受験する傾向性を示している。

表6 単独選抜制度評価と受験形態との相関分析及び単回帰分析の結果

従属変数	相関分析		単回帰分析				
	r	p 値	調整済 R ²	F 値	B	標準誤差	p 値
受験形態	-.148**	.000	.021	15.986	-.055	.014	.000

** ; $p < .01$

独立変数：単独選抜制度評価

2. 2. 3 受験形態と生活態度と性別

新制度による「受験形態」は「生活態度」に有意な差があるとは言えない。同様に、「一般入試」受験者の「性別」でも「推薦入試」受験者の「性別」でも、「生活態度」に有意な差があるとは言えない。

表7 受験形態と生活態度と性別の三重クロス集計 人数 (%)

		変えた	わからない	変えない	合計	
一般入試	男	65(12.7)	63(12.3)	167(32.6)	295(57.6)	Mann-Whitney U=29292.5 $\rho = .072$
	女	42(8.2)	79(15.4)	96(18.8)	217(42.4)	
	合計	107(20.9)	142(27.7)	263(51.1)	512(100.0)	
推薦入試	男	11(6.6)	16(9.6)	44(26.5)	71(42.8)	Mann-Whitney U=3089.0 $\rho = .299$
	女	16(9.6)	29(17.5)	50(30.1)	95(57.2)	
	合計	27(16.3)	45(27.1)	94(56.6)	166(100.0)	
合計		134(19.8)	187(27.6)	357(52.7)	678(100.0)	

Mann-Whitney U=39770.5 $\rho = .171$

ところで、「変えた」と回答した者を対象とした「生活態度」の変容内容は、「学習塾」(36.4%)、「自宅学習」(32.6%)と「学校生活(授業)」(16.7%)の上位3つで85.7%を占めていて、学習面に集約される。つまり、学習における場所が、自宅外なのか、自宅なのか、学校なのかの違いにすぎない。

2. 2. 4 受験形態と性別

「受験形態」では、「一般入試」で受験する者が多いことは制度上当然のことであるが、女子の方が「推薦入試」で受験する傾向が強いことがわかる。

表8 受験形態と性別 人数 (%)

	男	女	合計
一般入試	313(43.5)	231(32.1)	544(75.7)
推薦入試	75(10.4)	100(13.9)	175(24.3)
合計	388(54.0)	331(46.0)	719(100.0)

$$\chi^2 = 11.485, \rho = .001$$

2. 2. 5 受験形態と中学2年時での旧長崎5高校志望

中学2年生の頃に、旧長崎5高校を志望していた者は8割に達している。「いいえ」を選択した者の中には、地区外からの転入なども考えられることから、かなり多くの者が志望通り受験したことを示している。それゆえ、入試制度変更による旧長崎5高校志望への影響は見受けられない。また、「受験形態」は「旧長崎5高校志望」に有意な差があるとは言えない。

表9 受験形態と旧長崎5高校志望 人数 (%)

	はい	わからない	いいえ	合計
一般入試	433(60.2)	55(7.6)	56(7.8)	544(75.7)
推薦入試	149(20.7)	8(1.1)	18(2.5)	175(24.3)
合計	582(80.9)	63(8.8)	74(10.3)	719(100.0)

$$\text{Mann-Whitney } U = 45230.5 \quad \rho = .147$$

2. 2. 6 受験形態と性別と中学2年時の志望学科<コース>

表9において、「はい」と回答した者(中学2年時に旧長崎5高校を志望していた者)を対象としている。

「受験形態」と「志望学科<コース>」の関連では、普通科<理系コース>の志望者は「推薦入試」で受験している傾向がある。また、男子の方が「受験形態」に関係なく、普通科<理系コース>の志望が強かった。

表10 受験形態と性別と志望学科<コース>の三重クロス集計

		普通科	普通<文系コ>	普通<理系コ>	合計	
一般入試	男	178(41.2)	13(3.0)	62(14.4)	253(58.6)	$\chi^2 = 9.134$ $\rho = .010$
	女	126(29.2)	22(5.1)	31(7.2)	179(41.4)	
	合計	304(70.4)	35(8.1)	93(21.5)	432(100.0)	
推薦入試	男	36(24.3)	1(0.7)	26(17.6)	63(42.6)	$\chi^2 = 6.802$ $\rho = .033$
	女	59(39.9)	6(4.1)	20(13.5)	85(57.4)	
	合計	95(64.2)	7(4.7)	46(31.1)	148(100.0)	
合計		399(68.8)	42(7.2)	139(24.0)	580(100.0)	

人数 (%)

$$\chi^2 = 6.541, \rho = .038$$

2. 2. 7 受験形態と志願の異同

表9において、「はい」と回答した者(中学2年時に旧長崎5高校を志望していた者)を対象に、当時志望していた高校(学科・コース)と実際に受験し入学した高校(学科・コース)が同じか異なるかを尋ねたものである。ただ、ここで留意すべきは、B高校のみが旧制度と生徒募集

形態に変更がなかったことである³⁾。

「違う」と回答した204人 ($28.4\% <= 0.809 \times 0.351 \times 100 >$) は、入試制度や生徒募集形態の変更などの理由で志願変更した者であるが、「受験形態」での有意な差はない。

因みに、「志願の異同」は「単独選抜制度評価」と相関はなかった ($p = .254$)。

表11 受験形態と志願の異同 人数 (%)

	同じ	わからない	違う	合計
一般入試	250(43.0)	29(5.0)	153(26.3)	432(74.4)
推薦入試	94(16.1)	4(0.7)	51(8.8)	149(25.6)
合計	344(59.2)	33(5.7)	204(35.1)	581(100.0)

Mann-Whitney U=30938.5、 $\rho = .415$

2. 2. 8 受験形態と志願変更の理由

表11において、「違う」と回答した者（高校が異なる者、ないし同じであっても学科・コースが異なる者）を対象としている。

「志願変更の理由」では、「希望高校」と「希望学科・コース」がほぼ同率で、他を大きく引き離している。旧制度のもとでは必ずしも叶わなかった、本来希望していた高校(学科・コース)——ただし、E高校の理数科は新設であるが——を志願できたからということになる。また「推薦入試」受験者の方が、「希望学科・コース」の理由が強くなっている。なお、表12では「性別」を除いているが、「推薦入試」受験者では、男子の方が「希望学科・コース」をやや重視していた。

表12 受験形態と志願変更の理由

	成績上昇	成績下降	希望高校	希望学科・コース	友達と同じ	近親者と同じ	先生の勧め
一般入試	6(3.0)	17(8.4)	51(25.2)	40(19.8)	1(0.5)	3(1.5)	10(5.0)
推薦入試	0	1(0.5)	13(6.4)	23(11.4)	0	1(0.5)	4(2.0)
合計	6(3.0)	18(8.9)	64(31.7)	63(31.2)	1(0.5)	4(2.0)	14(6.9)

人数 (%)

その他	合計
24(11.9)	152(75.2)
8(4.0)	50(24.8)
32(15.8)	202(100.0)

(尤度比)
 $\chi^2 = 13.820$ 、 $\rho = .054$

2. 2. 9 志願変更の理由による単独選抜制度評価の規定要因

表13 志願変更の理由による単独選抜制度評価の規定要因

(重回帰分析：変数減少法)

独立変数	B	標準誤差	β	p 値
成績上昇	.537	.540	.069	.322
成績下降	-.963	.326	-.209	.003
友達と同じ	-1.630	1.298	-.087	.211
近親者	-1.130	.657	-.120	.087
先生の勧め	-.416	.364	-.080	.255
その他	-.263	.263	-.071	.317
定数	.630	.115		.000
R	.268			
調整済 R ²	.043			
F 値	2.483			
Signif.	.025			
N	200			

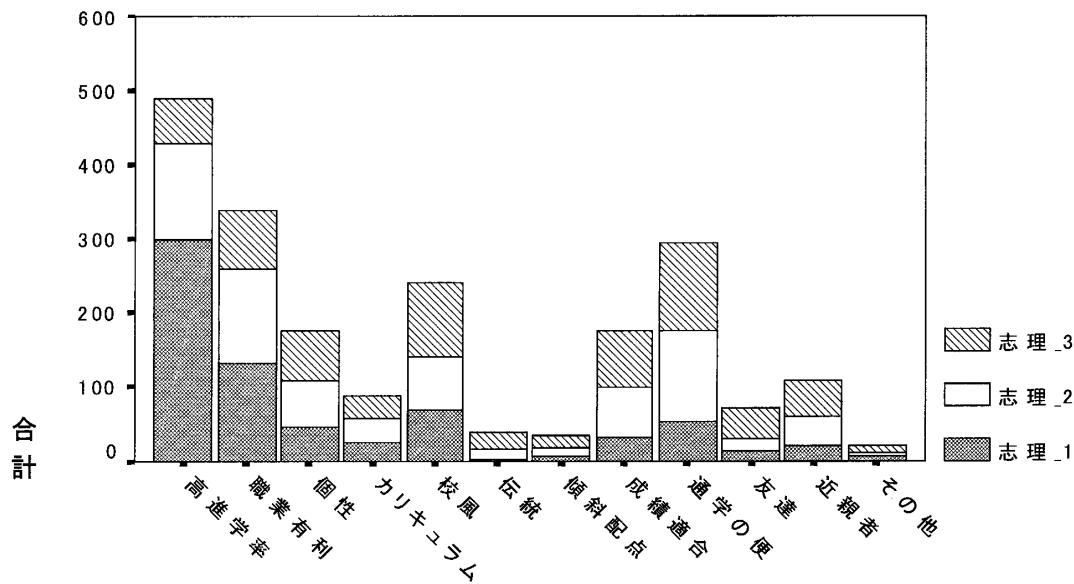
受験生における、志願変更の理由による単独選抜制度評価の規定要因は、「成績下降」が有意である。「成績下降」は新制度を歓迎していない。つまり、成績が下降している者は、希望高校（学科・コース）への進学可能性の低減という理由で望ましく思っていない。

2. 2. 10 現高校（学科・コース）志願理由

入学した高校（学科・コース）の志願理由を、最もあてはまるものを1として、3つまで順序づけてもらった。また、1人につき平均2.88（=2076÷720）の理由が順序づけられた。

「志願理由」の上位2つである「高い進学率」と「希望職業可能性」は、旧長崎5高校が進学校として存在していることを裏付けている。それゆえ、むしろ問題は、上位2つ以外の志願理由である。

「通学の便」は高校選択の重要な根拠であり、かつ旧制度との関連を強く示している。これに対し、新制度への移行と関連がある「カリキュラム」や「傾斜配点入試」の根拠は弱い、「校風が好き」は重要な根拠となっている。と同時に、「校風が好き」は「伝統」とは異なった意味があることを示唆している。いずれにしても、「校風が好き」の志願理由の高さは、このカテゴリーが高校の人気度の指標となりうることを示している。なお、図1からはみえないが、男子の方が「友達と同じ」「成績相応」を、女子の方が「近親者」「伝統」「校風が好き」をやや重視していた。



志理 図1 現高校(学科・コース)志願理由

表14 校風選択の高校別比率

高校	カテゴリー選択総数	校風選択数	比率
A	332	40	12.0
B	581	112	19.3
C	338	22	6.5
D	360	30	8.3
E	465	36	7.7
合計	2076	240	11.6

さて、「校風が好き」が高校の人気度の指標となりうると述べたが、その「校風が好き」選択の比率を高校別にみる(表14)と、B高校とA高校が平均値より高くなっている。AとBの両高校は、1948(昭和23)年11月に、旧制中学校2校と旧制高等女学校2校の4校を母体として2校に統廃合され、それぞれA高校、B高校として開校したものである。新制高校としては、A・B高校は同時に開校された兄弟校であり、C・D・E高校は、両高校の後に開校している。その意味では、A・B高校が「伝統」と関連がないとはいえないことと、3つまでの志願理由の選択制限を考慮すれば、必ずしも「伝統」と「校風が好き」に関連がないとはいえないことになる。それを暗示させる2つの変数の相関は、有意確率.058で、相関係数.071となっている。

2. 2. 11 生徒の様子

2. 2. 11. 1 生徒変容の有無

教員が、例年の中学3年生と比べて、高校1年生(昨年<2002年>度中学3年生)の様子をどのようにみていたのかを尋ねた。

中学校教員と学習塾教員との間に有意な差はないが、中学校教員は生徒たちの変化を幾分感じている。

表15 生徒変容の有無 人数 (%)

	変化あり	変化なし	合計	
中学校教員	64(57.7)	47(42.3)	111(100.0)	Mann-Whitney U=2404.5 p=.259
学習塾教員	23(47.9)	25(52.1)	48(100.0)	
合計	87(54.7)	72(45.3)	159(100.0)	

2. 2. 11. 2 生徒変容の内容

表15において、「変化あり」と回答した者を対象としているが、「部活動」「その他」のカテゴリーは除いている。

生徒変容の内容として「進路意識」が強いが、中学校教員と学習塾教員との間に有意な差がみられ、中学校教員は「進路意識」に特化し、学習塾教員は「授業態度」にも、生徒の変容をみている。

表16 生徒変容の内容 人数 (%)

	授業態度	生活態度	進路意識	合計
中学校教員	2(3.3)	3(5.0)	55(91.7)	60(100.0)
学習塾教員	4(17.4)	0	19(82.6)	23(100.0)
合計	6(7.2)	3(3.6)	74(89.2)	83(100.0)

(尤度比) $\chi^2=6.029$ 、 $p=.049$

2. 3 高校選択への影響

2. 3. 1 単独選抜制度評価と各高校との相関分析及び単回帰分析

表17 高校別／単独選抜制度評価と各高校との相関分析及び単回帰分析

高校	相関分析		単回帰分析				
	r	p 値	調整済 R ²	F 値	B	標準誤差	p 値
A	-.026	.488	-.001	.482	-.008	.012	.488
B	.156**	.000	.023	17.703	.059	.014	.000
C	-.044	.240	.001	1.382	-.014	.012	.240
D	-.135**	.000	.017	13.203	-.044	.012	.000
E	.018	.624	-.001	.241	.007	.013	.624

** ; p<.01

従属変数：各高校

独立変数：単独選抜制度評価

新制度への評価が、進学した高校の選択にどのように影響を及ぼしていたのかをみた。新制度評価と相関があるのは B 高校生と D 高校生である。新制度に好意的である者は B 高校に、望ましく思っていない者は D 高校に進学している傾向が強い。

2. 3. 2 志願の異同と各高校との相関分析及び単回帰分析

中学2年生の頃に志望していた高校(学科・コース)と実際に進学した高校(学科・コース)が異なる者が、進学した高校の選択にどのように影響を及ぼしていたのかをみた。志願の異同者と相関があるのは A 高校生、D 高校生と E 高校生である。ただし、志望と進学が一致している A 高校生と D 高校生に対し、E 高校生は異なっている。E 高校の理数科新設の効果は大きい。

表18 高校別／志願の異同と各高校との相関分析及び単回帰分析

高校	相関分析		単回帰分析				
	r	p 値	調整済 R ²	F 値	B	標準誤差	p 値
A	-.109**	.009	.010	6.930	-.043	.016	.009
B	-.049	.240	.001	1.381	-.023	.020	.240
C	-.055	.182	.001	1.783	-.021	.015	.182
D	-.117**	.005	.012	8.007	-.048	.017	.005
E	.305**	.000	.091	59.409	.135	.018	.000

** ; p < .01

従属変数：各高校

独立変数：志願の異同

3. 調査結果のまとめ

2. 1では、単独選抜制度の評価をみている。

①新制度は全般的に好意的に受け取られていて、特に学習塾教員は強い。好意的な理由としては「高校選択の自由」が最も強いが、中学校教員や学習塾教員では「高校の独自性」も少なからず支持していた。望ましく思わない理由としては、「高校受験競争激化」が最も強いが、中学校教員では「中学悪影響」も少なからずいた。いずれにしても、生徒、中学校教員と学習塾教員の立場の相違を反映していた。

②生徒における「志願理由」による新制度評価では、「校風が好き」「個性の伸長」の選択者は単独選抜制度を歓迎しているが、「友達と同じ」の選択者は望ましく思っていなかった。

2. 2では、生徒への影響をみている。

③新制度への移行は「生活態度」を変容させるほどの影響力をもたなかったが、新制度を好意的に受け取っている者は「推薦入試」で受験する傾向性を持ち、その傾向は女子の方が強かった。

④中学2年生時に旧長崎5高校を志望していた者のうち、男子の方が普通科<理系コース>の志望が強く、その志望者は「推薦入試」で受験する傾向を示していた。

⑤「志願の異同」は「受験形態」と相関がないことから、新制度への移行による志願の変更が「受験形態」の変更まで影響を及ぼしているとはいえない。

⑥「志願変更の理由」では「希望高校」「希望学科・コース」が強いことから、本来希望していたところを、新制度によって志願可能になったからということになる。特に、「希望学科・コース」の理由では、男子の「推薦入試」受験者はその傾向が強かった。

⑦「志願変更の理由」による新制度評価では、「成績下降」者は新制度を望ましく思っていない。「成績下降」による志願変更は、高校間の格差化による事前選抜の兆候を示唆している。

⑧「志願理由」の上位2つである「高い進学率」と「希望職業可能性」は、旧長崎5高校が進学校として存在していることを裏付けており、「通学の便」は旧制度との関連を示していた。だが、ここで注目すべき点は、「校風が好き」が高校の人気度の指標となりうるということであった。

⑨「生徒変容」に対する教員間の有意な差はないが、「変化あり」の内容としては「進路意識」が強い。中学校教員は「進路意識」に特化し、学習塾教員は「授業態度」にも、生徒の変容をみている。

2. 3では、高校選択への影響をみている。

⑩B 高校生は新制度を好意的に捉えていたが、D 高校生は望ましく思っていなかった。

⑪中学2年時に志望していた高校と実際に進学した高校の一致度がみられるのはA 高校生と

D 高校生だが、E 高校生はかなり異なっており、E 高校の理数科新設の効果は大きかった。

4. 考 察

長崎地区における総合選抜制度から単独選抜制度への移行は、「高校選択の自由」や「高校の独自性」などの理由で全般的に好意的に受け取られていた。その根拠として、生徒たちにとっては、「校風が好き」だったり、「個性の伸長」を期待するからである。一方、「高校受験競争激化」などの理由で必ずしも望ましく思わないのは、「友達と同じ」高校へ進学できないとか、「成績下降」による志望変更を迫られるからである。

また、新制度への移行は、生徒たちにとって、「生活態度」の変容や「受験形態」の変更をもたらすほどの影響力は持たなかったが、志望を変更した者では、「希望高校」「希望学科・コース」という変更理由が強かった。推薦の定員は、確かに新制度により拡大したため⁴⁾、新制度に好意的な女子は「推薦入試」で受験する傾向性を強く示し、中学2年生時に普通科<理系コース>の志望が強かった男子も、「推薦入試」で受験する傾向を示していたけれども、新制度への移行そのものとは関連がなかった。ただ、「希望学科・コース」の理由である男子の「推薦入試」での受験傾向にはこだわりを感じる。なぜなら、「一般入試」受験者には「成績下降」「希望高校」の理由がやや強くみられることと、「推薦入試」受験者は、たとえ不合格になっても再度「一般入試」で受験でき、さらにコースないし理数科の志望者には普通科を第2志望とすることが認められているからである。それゆえ、「希望学科・コース」の理由である「推薦入試」受験者は、「希望学科・コース」を強く熱望し、調査書などに自信を抱いている者であろう。

さて、新制度への移行に応じて、各高校ごとの特色が出されていたが、「カリキュラム」や「傾斜配点入試」などは志望理由の根拠とはならず、むしろ「校風が好き」という理由が、高校選択に大きな意味をもつことが明らかになった。その証拠として、「校風が好き」選択者の比率が最も高かったB 高校生は、新制度を最も好意的に捉えていた(63.1%)。このような結果は、旧長崎5 高校間に序列化をもたらす兆候として捉えることができよう。「校風が好き」というカテゴリーが、高校の人気度を測る尺度として有効であることを示唆している。

結 語

総合選抜制度から単独選抜制度への移行に伴う調査結果に基づくなら、新制度によって旧長崎5 高校間の格差の兆候が現れていた。総合選抜制度による高校間の格差解消と、平均以上水準の学力アウトプットの教育効果という仮説を前提に、新制度への移行を逆説的に考慮すれば、格差の兆候自体は予測の域を超えていないし、それゆえこの兆候は今後拡大の傾向を示し、明確な序列化となる可能性を秘めている⁵⁾。ただ、長崎地区の場合、序列化の明確化とスピードとは比較的緩やかであろうと推察される。なぜなら、2004(平成16)年度から連携型中高一貫校となったA 中学校・高校の、A 中学生が高校に進学する2007(平成19)年度からは、序列化の変動が予測され、さらに彼らが高校を卒業する2010(平成21)年度以降の進学実績によっては一層の変動が予測されるからである。

40年以上にわたり総合選抜制度をとっていた長崎県教育委員会は、文部科学省が推進する公立高等学校の入学者選抜についての、「適格者主義」を堅持した自由化の基本原則への対応に、慎重で堅実な姿勢を貫いていることから、流動性をはらんだ長崎地区の旧長崎5 高校間の緩やかな序列化は、県教育委員会の意図するところと思われる。だが、なぜA 高校が連携型中高一貫校

になり、B 高校のみが普通科文系・理系コース制が継続され、E 高校に理数科が新設されたのかの経緯は明らかではない。今後一層進展する少子化に対応するための、歴史がある高校の存続と空間的配置とを考慮した、教育行政的な布石の意図が感じられる。

[註]

- 1) 中央教育審議会が「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」を答申したことによって、教育改革論議がスタートした。その主な内容は、「小・中・高一貫教育課程」、「能力・適性に合った多様なコース化」や「生涯教育体制の確立」などであった。
- 2) 長崎県内での総合選抜校とは、長崎地区（長崎東・西・南・北・北陽台）、佐世保地区（佐世保西・南・北）と諫早地区（諫早・西陵）の各高校である。総合選抜入試は、長崎地区では1961（昭和36）年から、佐世保地区では1972（昭和47）年から、諫早地区では1986（昭和61）年から続いていたが、2003（平成15）年に単独選抜入試に変更となった。
- 3) 旧制度では、1995（平成7）年度から、5 高校とも普通科、普通科（文系コース）、普通科（理系コース）に分かれていた。
- 4) 旧制度では、2001（平成13）年度から、面接のみで学力検査を課さない一般推薦では、5 高校とも普通科12名、普通科各コース12名（定員の30%）であったが、新制度になると、特に普通科の一般推薦比率が上昇し、5 高校とも入学定員に占める推薦定員が上昇した。ただし、各校5名以内の特別推薦では変更はない。
- 5) 橋爪は、「学校差はその出発点を有利な学歴獲得へのストラグルという点にもち、いったん格差の兆しが生ずると、他のもろもろの要因を誘因しながら、累加的に拡大していくもの」（橋爪1959：74）と述べている。

[文 献]

- 富士教育出版社、1998、「平成11年度長崎県公立高校入試問題」富士教育出版社。
- 橋爪貞雄、1959、「中学生の学校差観」『教育社会学研究』14、東洋館出版社。
- 樋田・耳塚・岩木・荻谷、2000、『高校生文化と進路形成の変容』学事出版。
- 岩木秀夫、1977、「総合選抜制度の教育効果——学力水準との関連で——」『教育社会学研究』32、東洋館出版社。
- 国民教育研究所、1988、『高校入試制度の改革』労働旬報社。
- 松森武嗣、2003、『単独選抜高校入試制度に関する調査結果——長崎地区——』三恵社。
- 長崎県高校改革推進会議、2000、「新たな時代を展望した高校改革の推進及び生徒減少期における適正配置について」。
- 長崎県教育委員会、2001、「長崎県立高等学校改革基本方針」。
- 長崎県教育委員会、2002、「長崎県立高等学校教育改革第1次実施計画」。
- 長崎県教育委員会、2003、「長崎県立高等学校教育改革第2次実施計画」。
- 長崎県教育振興懇話会、1994、「長崎県立高等学校の総合選抜制度の改善について」。
- 長崎県教職員組合、1993、「国民合意の教育改革の実現を求めて——子ども・青少年の希望実現のための高校教育改善を——」。
- 尾嶋史章編、2001、『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房。

The Influence of the System Reform on the Entrance Examination of Public High Schools
— Around the Examinee —

Taketsugu MATSUMORI

This paper is the summary of a result of investigation in Nagasaki area, one of 3, that the entrance examination of public high schools had been enforced in Nagasaki Prefecture shifted from “Sogo Senbatsu” system to “Tandoku Senbatsu” system. A focus in this paper is especially exposed to the influence on the examinee.

Though the swichover to the new system was generally recieved favorably, It didn't have the influence which brought the transmutation of “life style” and “examination form”.

Moreover, the content of “curriculum” and the entrance examination which the difference is made out of for allocating marks between five subjects didn't become volunteer reasons for the examinee. Rather the reason of “school character” had an important meaning for the high school selection. I recognize there is an index which this reason shows the degree of populality by the new system and the gap between former Nagasaki—Five—Schools.

However, I guess the ranking and its speed is comparatively slow by another factor.